

「ウェイ!ウェイ!!女の子じゃん!!オレこっちではじめてあったよ!ねえねえ!それテイルモン人形とキュートモン人形しよ!オレも大好きなんだ!!」

「ちょっと肩組まないでよ私ひとに触られるの嫌なんだけど」

「うえ〜い。めんごめんご!それよりさ!見て見てオレとオタク君さモノホンのテイルモン見たんだ!ネット繋がらなくてマジ萎えだったけどスマホ持ってて良かった〜って!」

「えっ!?デジモンでいるのうわ!エゲツナイくらい可愛い!?うっそ!?」

「デビドラモンちゃんも見なよ〜!マジ可愛いよ!」

海辺に出た勇太達だったがはつらつな声で呼び止められた。

呼び止めたのは海原 イサミとオクタモンであった。

こちらを見るなり全速力で走って来て光が気になるのかすかさず声をかけてきた。

「…勇太怒ってるの?」

「べつに…光はあんまり人と絡まないしこうやって話すの大事だし…べつに」

言ってる事に対して勇太はどこかむすっとしているイサミと光の顔が近づくと無意識か手が少し動いている。

「なんか俺と話してる時より楽しそう…」

周りには聞こえない…本人すら言った事を自覚していないような小さな声で勇太は呟いた。

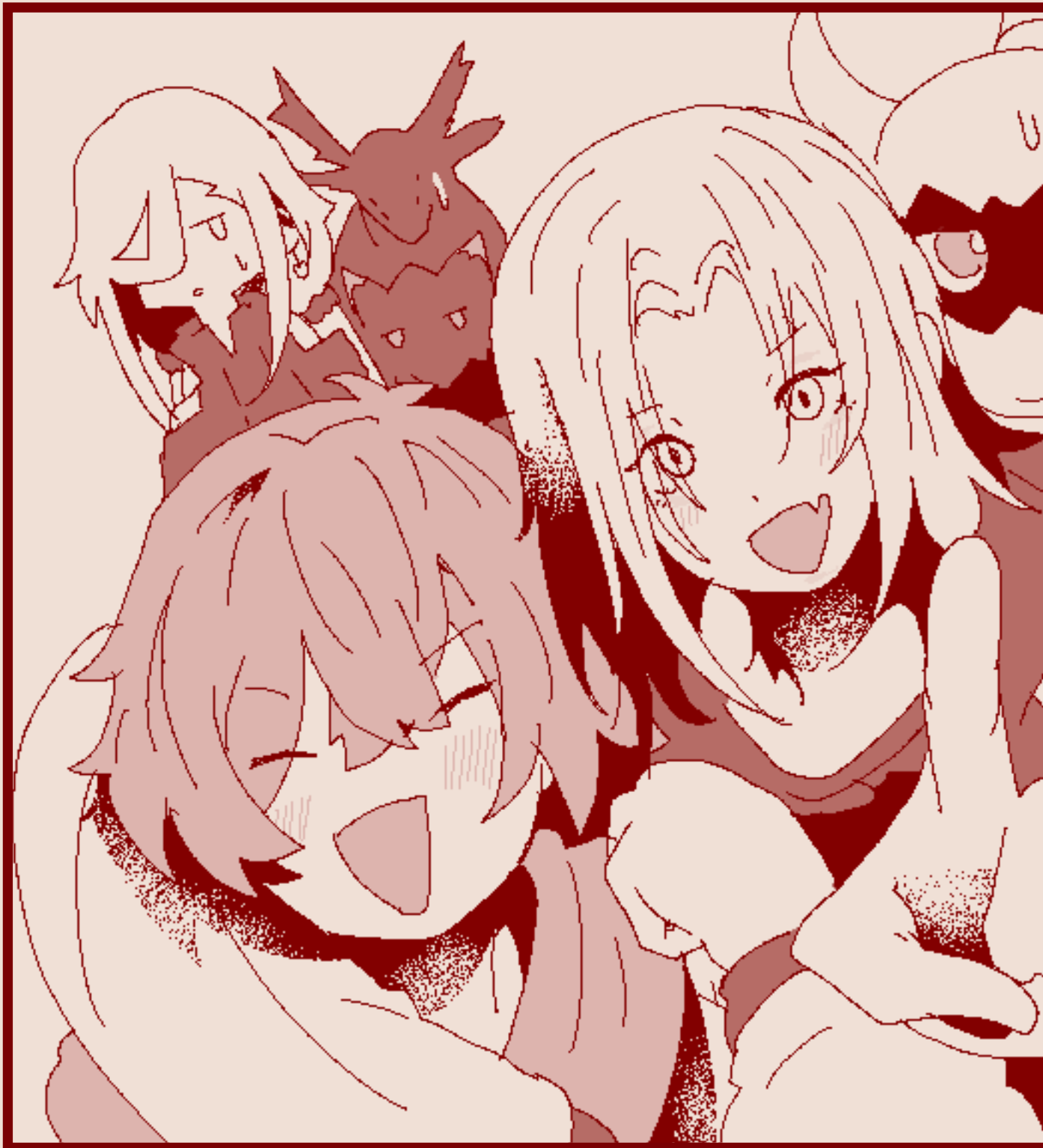
「そろそろ行こうよ光!」

「ええ〜あんたしばらくここでゆっくりするって言ってたじゃない…それよりさあ」

「…」

「イサミ殿これ BBS になってないでござるか?ボク的というか聖騎士的に BBS ってどうかと思うでござるよ!？」

「BBS ?オレ TKG には納豆も付けたいんだよね〜勇太君は TKG に何つけたい〜!？」



「イサミ兄ちゃん!あっちにめっちゃいい感じの洞窟あったんだよ!行ってみよ!」
「ウェイ!ウェイ!勇太オレこういった洞窟の怖い話持ってます!」
「イサ兄何それ!?聞きたい!聞きたい!絶対雰囲気出るじゃん!」
気付けば光ではなく勇太の方が完全にイサミに懐いてしまっていた。
「馬鹿がふたりに増えたわね…」
「勇太僕と遊んでる時より楽しそう…」
「ヴォーボモンデビドラモンとあそぶ?」
「イサミ殿別の意味で BBS になってないでござるか?ボクのというか聖騎士的にこっ
ちの BBS の方がどうかと思うでござるよ!」
「イサ兄も一緒に行こうよ〜!」
「泣くな勇太!また会える時もある!光ちゃんもまた遊ぼうね〜!」
イサミと別れ再び旅を再開した。
「…」
「あれ?ヴォーボモンどうしたの?」
「べっつに〜」
「あんた責任取りなさいよ?」
「?」
勇太達の旅は続く